旧産炭地の地域再生

岡田　彩伸

Ⅰ　はじめに

明治維新に日清、日露、日中戦争、そして第二次世界大戦をも含む約 120 年という長い動乱の時を、炭鉱[1)]の島として日本の経済を支えながら生きてきた高島。エネルギー革命による石炭から石油への主要燃料の転換、そして閉山。炭鉱の閉山という主要な産業を失った町の過去と現在、そして未来について、高島より一足早く閉山した伊王島、そして高島より 15 年後に閉山した池島の 3 島を比較してみてみようと思う[2)]。

まず本題に入る前に、簡単に石炭とその採掘方法、また現在におけるエネルギー源としての石炭の位置付けなどについて述べたいと思う。

> せきたん　石炭　coal：　陸生・水生の植物が水中に堆積し、埋没後続成作用を受け、加圧され変質して生じた可燃性の岩石。成層した炭質岩の一種。外観は黒褐色を呈するが、光沢の有無によって、輝炭・暗炭およびこれらが互層する筋引き炭と呼ぶ。薄片でみると、植物質と鉱物質の不均一集合体であることがわかり、花粉・胞子・角皮・表皮などがみられる。分類は発熱量・燃料費・粘結性などが基準で、褐炭・亜瀝青炭・瀝青炭・無煙炭などが日本基準規格（JIS M1002）で定められている。石炭は塊状をなすが、構造運動を受け粉炭になり、また眼紋を生ずることがあり、火成岩の迸入によって煽石化する化学的性質を知るには工業分析が行われ、水分・灰分・揮発分・固定炭素などが百分率で表され、また元素分析では、C、H、N、O の量が示される。石炭を顕微鏡下で反射光をもって観察すると石炭組織成分が分類できる。日本の石炭は主に古第三系に含まれ、三畳系のものもある。褐炭は新第三系に多い。日本の理論埋蔵炭量は確定・推定・予想を合わせ約 260 億ｔ。世界全体では 2 兆～14 兆ｔ。

以上は「新版　地学辞典」からの引用である。つまり、石炭は、寿命を終えた植物が地中や水中の底に埋もれ、その上に水が運んできた泥や砂が積もっていく。それがやがて地殻変動で地面が沈み、水面があがる。その繰り返しで地中にたくさんの植物の遺体が積み重なり、その上に土が積もっていったものが、上からの土の圧力と下からのマグマの熱によって埋もれた植物の遺体が押し固められ、黒い石、つまり石炭へと変化する。これを何度も繰り返し、何百万年、何千万年という長い時をかけて何百 m、何千 m という地中深くへと埋もれていく。こうして炭層は出来上がるのだ。炭層の厚さは数十 cm のものから数十 m のものまで様々で、炭層が地中に広がっている場所全体のことを炭田と呼ぶ。

では次に、石炭の採掘方法にはどのようなものがあるのかを述べたい。炭鉱は、石炭がどこに埋まっているかによって露天掘り炭鉱と坑内掘り炭鉱の 2 種類に分けられる。

露天掘りは、炭層が地表から 100m くらいの浅いところにある場合にとられる方法であり、炭層の上に被さっている砂岩や頁岩などをパワーショベルやドラッグラインなどの大型の機械

を使って取り除く。岩石や石炭があまりにも固い場合はダイナマイトなどの爆薬が用いられることもある。

坑内掘りは、露天掘りをした後に、更に深く露出させたい場合や、炭層が深い場所にあったり、山の中腹、または海底にあったりする場合にとられる方法である。坑内掘りではまず、斜坑（斜めのトンネル）、竪坑（垂直の穴）、水平坑道を掘り、石炭に当たったら切羽（石炭を掘る場所）を作る。坑道と切羽は崩れないように木や鉄製の枠で支えたり、天井に長くボルトを打って支える。また、それぞれの坑道には斜坑人車や高速人車で移動をする。採炭プラントでは石炭をコンティニュアスマイナーやドラムカッターなどの機械を使って石炭を掘る。どちらも鋼鉄製の円筒や厚みのある円盤に歯をうえたものを回転させて、石炭を崩していく仕掛けである。掘った石炭はベルトコンベアーに乗せられ、長い坑道を通って外へ運ばれる。複雑な地層構成を持つ日本の炭鉱は、この坑内掘りを行っていたところが多い。今回の調査地域の高島、伊王島、池島も坑内掘り炭鉱に分類される。

本稿で扱う題材が炭鉱の閉山に深く関わっているため、そこだけ見ると石炭は石油に取って代わられた過去のものであると誤解しそうになるが、実際はそうではない。日本でもいまだに年間１億 6,000 万ｔ以上の使用があり、現在、そのほとんどを外国からの輸入に頼っている。世界中の石炭の埋蔵量は合計約 3 兆 4,000 万ｔといわれ、実際に掘り出すことのできる可採埋蔵量は 9,000 億ｔになる。石炭は石油や天然ガスに比べたらかなり豊富な資源なのである。

機関車などが走らなくなった今、石炭は一体何に使われているのか、その答えは製鉄や火力発電である。製鉄業では、石炭をコークス（石炭を蒸し焼きにしたもの）に加工して使う。火力発電では、石油の方が石炭より軽くて使いやすいという理由から石油が多く使われていたのだが、埋蔵量の関係からまた石炭火力発電所が注目され、大きな石炭火力発電所が作られるようになった。

では、まだまだ必要とされている石炭がなぜ日本国内で生産されないようになったのか。その最大の理由は、日本の石炭の価格が高いことにある。また、日本で多くの炭鉱がとっていた坑内掘りは、爆発や落盤などが起こる危険性が高く、露天掘りよりコストがかかるというのも原因に挙げられる。炭鉱の閉山には大きな事故などが契機となっているところも多いが、事故はあくまで“きっかけ”で、実際のところはここに原因があるという。エネルギー革命により石油にエネルギー供給首位の座を奪われたものの、1973 年の石油ショックにより石炭の重要性は見直されてきたのだが、日本の石炭より安い外国の石炭が国内に入ってくるようになると、日本の炭鉱は生産を続けることができなくなったのである。それに伴って旧産炭地では、石炭に頼りきっていた生活から一変、どのような開発を行い、地域を盛り立てていくのかが課題となっている。

Ⅱ　対象地域の概要

１．長崎県長崎市高島町

高島（図１、表１、写真１）は、1770 年（宝永 7 年）に肥前平戸の領民“五平太”によって石炭が発見され、事業化、採掘が開始された。その後、佐賀藩に移り、英国人トーマス・グラバー[3)]との共同経営で日本最初の洋式採炭機械を導入した炭鉱としてスタートした。さらにいったん官営化された後、後藤象二郎[4)]が払下げを受け、1881 年（明治 14 年）に岩崎弥太郎[5)]が買収し、三菱の経営となって石炭産業を基幹とした町として隣に浮かぶ炭鉱島、端

島（軍艦島）（写真２）と共に大きく発展した。しかし、石炭産業も転換期を迎え、1986 年に約 120 年にわたる石炭の町としての歴史に幕を閉じることとなった。

そして 1991 年、新たな町づくりとして活路を拓くべく、水産業を中心とした整備計画「マリノベーション構想」[6)] に基づき、磯釣り公園や人工海水浴場の整備を行い、1997 年にオープン。また、それとは別に 1998 年にキャンプ場が完成。その経済波及効果で町の再生を図るべく積極的に事業の推進に努めている。2005 年には長崎市と合併し、西彼杵郡高島町から長崎市高島町となる。

２．長崎県長崎市伊王島町

1889 年（明治 22 年）の町村制施行で伊王島と沖之島が合併し伊王島村となり、その後、1941 年の炭鉱開鉱で人口が急増、

写真１　高島（伊王島から撮影）

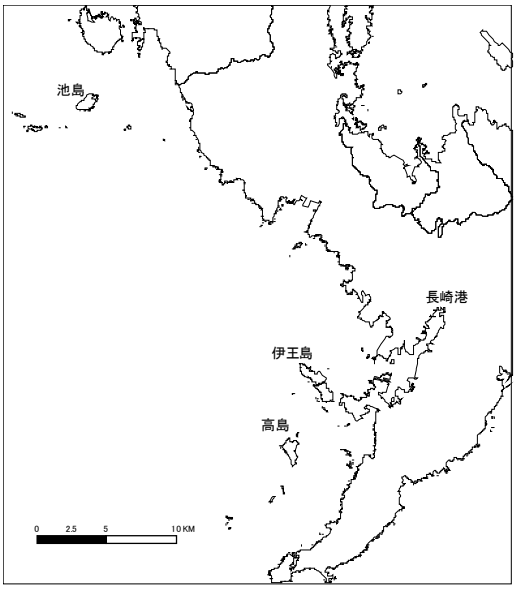

図１　３島位置（高島・伊王島・池島）

写真２　端島（高島から撮影）

表１　３島の詳細

	高島	伊王島	池島
位置	北緯 32°39′ 東経 129°45′ 長崎市の南西約 14.5km （長崎市から高速船で約 35 分）	北緯 32°43′ 東経 120°46′ 長崎市の南西約 10km （長崎市から高速船で約 20 分）	神浦湊から約 7km
面積	1.27k ㎡ （周囲 6.4km、東西 1.2km、南北 1.8km）	伊王島 1.31 k ㎡（周囲 7.1km） 沖之島 0.95 k ㎡（周囲 5.1km）	1.06 k ㎡ （周囲 4km）
人口	653 人（2008 年 9 月）	807 人（2005 年 10 月）	472 人（2005 年 10 月）
交通	定期航路 （長崎～高島　1 日 10 便、約 35 分） 　また、香焼～高島間には、海上タクシーが就航している（所要時間約 10 分）。	定期航路 （長崎～伊王島　1 日 11 便、約 20 分） 　2010 年には本土（香焼）と伊王島とを結ぶ伊王島大橋が完成予定である。	フェリー （神浦港～池島　1 日 5 便　27 分） （瀬戸港～池島　1 日 7 便　30 分） 町委託船 （神浦港～池島　1 日 3～4 便　12 分） 高速船 （瀬戸港～池島　1 日 2 便　12 分）

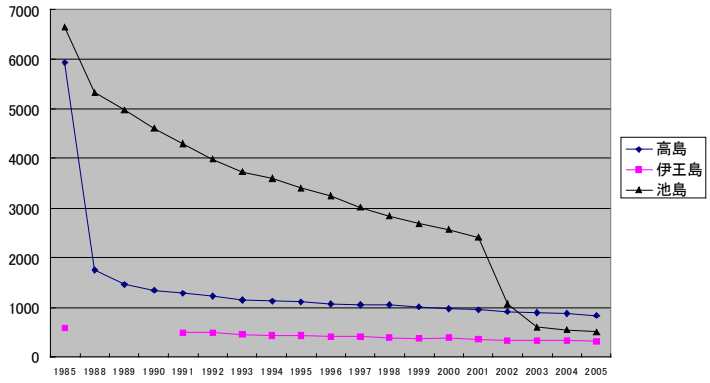

図２　高島・伊王島・池島人口の変遷
注：1988～1990 年の伊王島データは欠損
資料：離島統計年報より作成

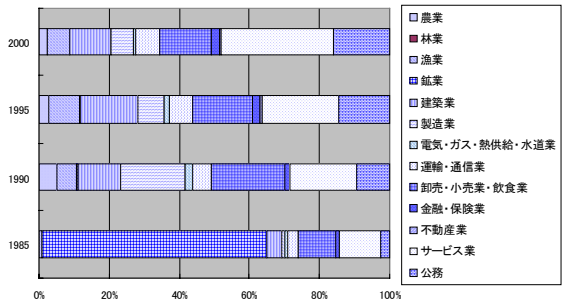

図３　高島　産業分類別就業者数
資料：離島統計年報から作成

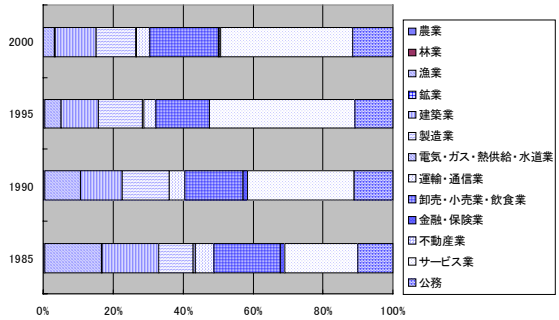

図４　伊王島　産業分類別就業者数
資料：離島統計年報から作成

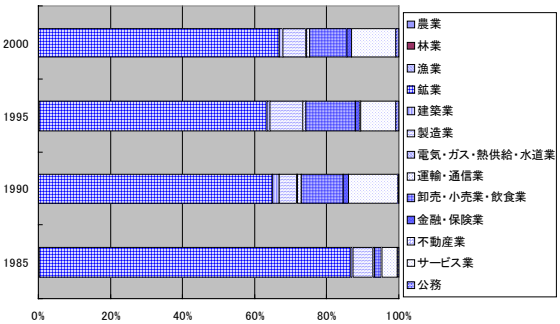

図５　池島　産業分類別就業者数
資料：離島統計年報から作成

最盛期の 1962 年に町制を（世帯数 1,748 戸、人口 7,300 人）施行した。その後、1972 年の閉山で急激に人口が減少したが、1989 年のリゾート開発により人口減の歯止めと交流人口の拡大が生じている。2005 年に長崎市と合併し、西彼杵郡伊王島町から長崎市伊王島町となる。

３．長崎県長崎市池島町

1952 年に炭鉱が開発されて以来、石炭産業が基幹産業として地域発展の中心的役割を果たしてきた世界唯一の海底石炭基地であった。しかし、内外炭の価格差などで経営維持が困難となり、2001 年 11 月、42 年間にわたる炭坑の歴史に幕を下した。2002 年からは国の「炭鉱技術海外移転事業」が実施され、ベトナム及びインドネシアから研修生を受け入れ、池島炭鉱で培われた炭鉱技術の移転を図っているほか、日本の近代化を支えてきた石炭産業の現場を学んでもらうため、修学旅行生等を炭鉱施設へ受入れるなど、立坑跡や斜坑模擬切り羽などを見学することができる体験型の観光体験学習も行われている。2005 年に長崎市と合併し、西彼杵郡外海町から長崎市池島町となった。

以上の３島について人口の推移と産業分類別の就業者構成を図２から図５に示

した。これらの図から、１島１町１企業であった地域がその主要な産業を失い、企業が島から撤退するだけでどれほどの影響をその地域に与えるのかがよく分かる。特に図２における高島の人口推移を示す曲線は、閉山の年を境にたった５年で別の町になってしまったという印象さえ与える。

Ⅲ　高島と伊王島における地域開発

１．調査概要

今回の調査期間は 9 月 16 日から 9 月 19 日であり、16 日と 17 日、19 日は高島の現地踏査を行うとともに、長崎市高島行政センター、崎永海運株式会社高島トマト事業部、高島小学校、同中学校を訪問して聞き取り調査を行った。18 日は、午前中に長崎市商工会館において、午後は長崎市伊王島行政センターにおいて聞き取り調査を行った。

２．高島

以下、高島行政センターや崎永海運（株）高島トマト事業部、高島小中学校、町の食堂でお聞きした話や頂いた資料の引用、出版物を元に文章を作成する。

（１）炭鉱時代

高島の地勢については、明治 31 年 4 月高島尋常小学校長北村猪作氏の記述によると、高島は、飛島、二子島などの数島から成っており、その周辺には伊王島、蚊焼、高浜、中の島、端島がある。住民は 560 戸、人口 3,024 人であった。三菱炭鉱、同事務所、警察分署、村役場、小学校、郵便局、病院等の施設があり、宗教は耶蘇教が最も多く、その他禅宗、浄土宗、法華宗、真言宗がある。生業は農業、漁業、それに炭鉱事業に従事するものが多い。冬は烈しい北風に、夏は南風の強風にさらされ、土地も痩地である。特に土地の水分が足りないのは炭鉱の採掘に原因するのかも知れない。人口の割に土地が狭く日常の食物は他所より移入する外なく、中でも水は他所から買うような状態である。動物も少なく植物も、松、あこう、竹、くさぎ等、鳥類は、雀、鶏、鴨、鴎の類、また猫や山羊の外けもの類も少なく、ただ多いのはねずみだけということである。

地形は四角型で、湾の入江もなく、従って舟をつなぐ所もなく、舟は浜に引き上げておくということである。島の西は険峻絶壁で、遥かに海を眺めれば風景絶佳である。島の南方東方は、

写真３　グラバー像（グラバー別邸跡）

写真４　岩崎弥太郎像

表２　高島詳細年表

1185(元治元年)	高島に平家の落武者が住みつく
1695(元禄8年)	五平太により「燃える石」として石炭が発見される
1716(享保元年)	石炭事業が深堀氏直営となる
1810(文化7年)	端島で石炭が発見される
1817(文化14年)	高島の石炭採掘が佐賀藩直営となる
1868(慶応4年)	高島炭鉱が佐賀藩とトーマス・グラバーとの合併会社となる
1869(明治2年)	日本最初の洋式竪坑である北渓井坑が開坑し、蒸気機関による採掘が行われた―この頃より本格的な石炭の採掘が始まった
1870(明治3年)	天草の小山某氏が端島砿を創業
1871(明治4年)	尾浜に南洋井坑が開坑される
1872(明治5年)	高島が長崎の直轄化に置かれる
1874(明治7年)	高島炭鉱が官営となる
	高島炭鉱が蓬莱社(後藤象二郎)に払い下げられる
1875(明治8年)	高島小学校開校
1876(明治9年)	尾浜に横坑が開坑される
1879(明治12年)	西彼杵郡高島村となる
1881(明治14年)	高島炭鉱が三菱(岩崎弥太郎)に譲渡される
1884(明治17年)	中ノ島が開坑される(明治26年終掘)
1887(明治20年)	日本最初の鋼鉄船「夕顔丸」(201トン)が進水
	鍋島氏が端島第1竪坑を開坑
1890(明治23年)	三菱が端島炭鉱の経営にあたる
1895(明治28年)	端島第2竪坑が開坑される
1896(明治29年)	端島第3竪坑が開坑される
1897(明治30年)	高島の納屋制度[7]が廃止され、三菱の直轄地となる
1898(明治31年)	高島小学校が高等科を併設し、高島尋常高等学校となる
1901(明治34年)	蛎瀬第1竪坑(169m)と第2竪坑(194m)が開坑される(大正12年廃坑)
1904(明治37年)	飲料水の確保を目的とする製塩業６）が始まる
1906(明治39年)	蛎瀬竪坑でガス爆発事故が起こる
1913(大正2年)	二子竪坑が開坑
1916(大正5年)	端島に日本最初の鉄筋高層アパートが完成(7階建)
1920(大正9年)	第1回国勢調査が実施される
	高島の人口8907人、世帯数1791世帯
1922(大正11年)	高島炭鉱で直接石炭積みが開始される
1925(大正14年)	端島第4竪坑が開坑される
	高島と二子島が完全に接続される
1932(昭和7年)	二子坑でガス炭塵爆発事故が起こる
1935(昭和10年)	端島鉱でガス爆発事故が起こる
	高島新坑(斜坑)が閉坑される(昭和20年廃坑)
1941(昭和16年)	高島小学校が高島村国民学校となる
1943(昭和18年)	二子南部坑で爆発事故が起こる
1945(昭和20年)	端島で石炭積込中の白寿丸が魚雷を受け沈没する
1946(昭和21年)	高島炭鉱労働組合が結成される
	端島炭鉱労働組合が結成される
1947(昭和22年)	高島中学校を開校
1948(昭和23年)	高島町制を施行
1949(昭和24年)	野母商船が長崎～高島～羽島～野母経由航路を就航
	都市計画法[8]の適用により、人口集中地区に指定される
	長崎県立長崎西高校高島分校が開校(1960年県立高島高校となる)
	端島で映画「緑なき島」[9]のロケがあり、全国に紹介された
1950(昭和25年)	高島保育所を開所、高島保育園を開園
1951(昭和26年)	端島鉱の深部地域でガス突出事故が起こる
1953(昭和28年)	高浜村端島保育所が完成(49年1月廃止)
	離島振興対策地域[10]に指定される
1955(昭和30年)	高浜村端島と合併(合併前の行政区域となる)
1956(昭和31年)	蛎瀬保育園を開園(50年3月廃止)
1957(昭和32年)	日本初の海底水道「高島・端島海底水道」[11]が完成
1960(昭和35年)	端島の人口が5267人でピークを迎える
1961(昭和36年)	野母商船のせい丸とつや丸が就航
1962(昭和37年)	産炭地域振興臨時措置法[12]の第10条地域に指定される
	夕顔丸、屋島丸、高島丸が廃船となる
	高島一周循環バス(民営)が運行
1963(昭和38年)	高島・端島の人口が21965人で高島町としてピークを迎える
	二子竪坑が開坑
1964(昭和39年)	端島鉱でガス爆発事故が起こる
1965(昭和40年)	端島三ツ瀬新坑より出炭を開始

注：下線は端島

表２　高島詳細年表（続き）

1968(昭和43年)	高島の人口が18019人でピークを迎える
1973(昭和48年)	長崎地域広域市町村圏[13] に指定される
	端島鉱の閉山が労働組合に正式に提案される
	産炭地域振興臨時措置法の第6条地域に指定される
1974(昭和49年)	端島炭鉱が1月に閉山、小中学校は閉校し、高島～端島航路が閉鎖、4月には無人島となる
	最後の高島鉱業所船朝顔丸が廃船となる
	高島保育園を廃止
1975(昭和50年)	高島幼稚園を開園
1979(昭和54年)	保健センターを設置
1986(昭和61年)	三菱高島鉱業所閉山
	菱高開発(株)設立
1987(昭和62年)	高島興産(株)設立(現「高島シーテックス」)
	(株)シーテックス設立
	町営浴場開始
1988(昭和63年)	(株)高島久松成立
	石炭資料館設置
	シンコー物産(株)設立
	高島保育所を休所(1998年廃止)
1989(平成元年)	県立高島高校閉校
	町立病院を診療所に縮小
	(株)高島グリーンファーム設立
1990(平成2年)	三菱石炭鉱業(株)解散
	水産庁のマリノベーション拠点漁港漁村総合整備計画の策定地域に高島が指定される(1991年計画を認定、1992年着工)
1994(平成6年)	水産会館完成
	長崎汽船高速船運行(1日10便)
1995(平成7年)	東海岸公園完成(県施設)
	高島小・中学校が併設校となる
1997(平成9年)	飛島磯釣り公園と人口海水浴場がオープン
1998(平成10年)	全国過疎地域活性化連盟会長賞受賞
1999(平成11年)	「潤いと活力のある町づくり」自治大臣賞受賞
	ふれあいキャンプ場がオープン
2002(平成14年)	風力発電所完成
2003(平成15年)	海水温浴施設「いやしの湯」完成
2005(平成17年)	近隣5町と共に長崎市と合併

注：下線は端島

坑業機械、鉄道の付設、それに巨大な煙突が天高くそびえ立っている。山は丸尾頭が一番高くここに登ると遠く近く美しい島の姿が青い海に浮んで見える。産物は石炭。炭質は高級善良で、世界的に有名である。また、長崎市までは海上渡船 14 ・ 5 ㎞、端島までは４㎞汽船が往復しているので、渡海、物品の購入は大変順調便利である（高島町 1949)。

行政センターでもらった高島町半世紀の記憶の中の写真を見ると、炭鉱時代の高島の繁盛振りが良く分かる。現在の状況を見てからであるのでその写真の中の光景には事情を分かってはいても驚かずにはいられない。

高島では元々島に先祖代々住んでいた人は少ない。端島にいたってはもとは無人島であったのだからなおさらだ。炭鉱が開かれてから徐々にその人口を増やしていったのである。鹿児島などから炭鉱に働きにやってきた労働者の寄せ集めでできた島でもあった。最盛期の 1969 年には 2 万人近くの人が島で生活しており、鉱業所の操業時間が 24 時間体制で、3 交代勤務であったため、昼夜を問わず人通りが絶えることがなかった。特に島にあった 2 ヶ所の市場では、朝から生鮮食品を買い求める主婦でごった返していたという。3 交代制というのは、一番方、二番方、三番方に分かれ、午前 7 時、午後 5 時、午前 1 時の入坑を一週間ごとに繰り返す、という制度のことである。中には二つの時間帯にまたがって働く坑夫もいたという話も聞いた。ひとたび事故が起これば大惨事になりかねないという職場で、命懸けで働く夫の食事、

写真５　高島の北渓井坑跡

写真６　三角溝

写真７　高島模型（石炭資料館）

写真８　石炭資料館

睡眠に妻は神経をつかい、炭鉱で働く者を家族に持つ家庭はその仕事時間にあわせた生活を余儀なくされていたという。こうした大人中心の生活の中で子どもたちははじき出され、問題行動を引き起こすこともあったという。1983 年（これは閉山間際であるが）当時、高島の子どもたちの喧嘩の数や少年非行は警察の少年課の発表でも長崎でナンバー・ワンだったという文献を目にした。ただし、これは高島というよりは炭鉱島という島の特色なのではないか。『高島文化史』では高島の風習に賭博と喧嘩、脱島者（高島では「けつわり」と呼んだ）が挙げられているため、そういった気風もあったのか、とも考えたが、こういった風潮が時代の移り変わりとともに影を潜めていったように、次の項で詳しく述べるが、子どもたちも閉山という時

代の流れの中で変わっていく。どちらにしても、現在の穏やかな高島しか見ていない私にはなかなかしっくりとこない話でもあった。

鉱業所の職員は給与が高かったため生活水準は高く、カラーテレビ、大型冷蔵庫、エアコン、洗濯機といった電気製品は各家庭に備えられ、電気店も 4～5 店舗が繁栄した。また、自家用車も多数あって、長崎航路でフェリーが運航した時期もあり、周辺の地域と比較しても裕福な暮らしぶりであった。島内での娯楽は映画館、ボウリング場、パチンコ店、マージャン店があり、多くの人で賑わった。また、4 月には山祭りが行われ各地区から神輿が繰り出され、大人も子どもも総出で島中をなり歩いた。娯楽施設や行事があったのは端島も同様で、特に映画は島民すべての楽しみであったため、毎月の上映映画のプログラムが各家庭に配布され、映画館は毎日満員の盛況であったという。

では、給与が高かったというが、高島の鉱業所ではどのような労働者構造になっていたのか。三菱高島炭鉱は三階層の集団で構成されていた。成立時期ははっきりとはしないが、下請け会社組夫が明確な形で導入されたのは、第 2 次世界大戦直後に坑道の掘進工程に建設企業が参入してからである。1986 年の閉山時点で三菱石炭鉱業高島炭鉱所には、103 人の職員と、872 人の鉱員、583 人の下請け会社組夫が炭鉱労働に従事していた（西原・齋藤 2002）。

職員というのは親会社三菱鉱業セメント（当時）からの出向社員という形をとり、高学歴のホワイトカラー職（管理職）・専門的技術職の他、坑内において鉱員の作業を直接に指揮・監督する係員からなる。さらに詳しく分けると、職員には、大学、専門学校・中学卒業者（旧制）が直接に炭鉱企業に雇われる直雇(傭)組と、鉱員が登用試験によって引き上げられた登用組とがあり、直雇組と登用組には格差があった。

鉱員は高島では『本鉱』と呼ばれ、三菱石炭鉱業の直轄社員として、主として掘進・採炭・仕操・運搬などの坑内外の基幹的作業に従事し、強力な交渉力をもつ組合を組織していた。閉山時の平均給与は当時で 28.1 万円に達したという。

組夫は鉱業所と契約した請負会社（組）に所属する労働者をさし、坑内での起業工事や坑道掘進等の請負作業および坑内外での補助的作業を行っていた。坑内のより危険な作業および採算の悪い作業に従事することが多かった。鉱員と比べても、組夫は教育歴や技術力の面で不利な立場にあり、組合もなく雇用が不安定で、閉山時の平均給与が当時で 16～25 万円程度だった。

この階級差はそのまま島の子どもたちにも影響する。やはり同じ階級同士自然と固まっていたし、着ている物や食べている物にもそれなりに差はあったという。この当時、各家庭には風呂がなく、鉱業所から出る蒸気を利用して公衆浴場が島内に数十箇所設けられていた。これには誰でも無料で入れ、交流の場となっていたが、階級によって入れる風呂は異なっていたという（真っ黒に汚れた鉱員が入る風呂が別にあるというのはある意味当たり前の話でもあるが）。

上の高島文化史の中から引用した部分に水は他所から買うような状態という記述があったが、海に囲まれた河川のない小さな離島という環境は炭鉱の事業用水（発電、選炭、製塩、消火などに使用）および従業員とその家族の生活用水を手に入れるには困難を極めた。水事情は 1957 年に高島・端島海底水道が完成するまで [14]、海水と蒸留水の時代（明治）から清水運搬船の時代（大正、昭和）を経ることになる。端島では清水が貴重であったため、炊事・洗濯の下洗い、トイレの使用後、風呂、プール、消火栓には、海水が使われた（後藤・坂本 2005）。しかし、端島ではこの頃からアパートの屋上に庭園が作られていた。これに貴重な清水や植物に

害のある海水を使うわけにはいかない。よって屋上庭園には天水が使われていたという。

島外への交通手段は船に限られ、長崎市内へは 450 人乗りの船で 1 時間ほどかかり 1 日に 9 便運行していた。特に日曜日には 1 隻に乗り切らずに臨時便が出るほど人の行き来があったという。高島では船賃に社員割があったらしい。

面積 1.27k ㎡の小さな島、高島は、大きな複合商業ビルのようなもので、日本の高度経済成長を支え、それとともに発展した島であった。

（2）閉山

「閉山するかもしれない」、高島の人々の心の中にそんな思いが強くのしかかるようになったのは 1986 年の 4 月頃である。他県の鉱山が次々と閉山していくのを背景に、前年 1985 年に起こった鉱山の大きな事故がその契機だったのだろうか、それから 1 年もたたないうちに町の人々の反対もむなしく、同年の 11 月 27 日、高島鉱は閉山した。

閉山に付随して起こってくる問題の 1 つが、鉱山で働いていた人たちの再就職の問題である。他の鉱山（池島炭鉱など）に行く者もあったが、池島は三菱の炭鉱ではないし、そもそもすでに鉱業の時代は日本では終焉に向かおうとしているのが現状であったため、そのケースは少なかった。では三菱はどう対処したのだろうか。

三菱の鉱員・下請会社・高島町に対する対応は、新規事業・企業誘致への関与を別にすると、後に続く炭鉱の「なだれ閉山」時のモデルケースとされ、高い評価を受けている（西原・齋藤 2002）。職員については退職予定者 10 人を除く全員が解雇されることなく三菱鉱業セメントの他事業所および関連企業に転勤・出向することが閉山時に決定されていた。鉱員は解雇されたものの、三菱から手厚い処遇を獲得した（閉山交渉合意事項　退職金・ 61 年下期ボーナスを全額支払う、誠意をもって就職を斡旋するなどの内容）。また、下請会社の組夫への処遇は会社によって異なっており、解雇通知予告金および 10 万円程度の退職金を払った会社もあったが、そうでない会社もあるなど、いずれにせよ鉱員との差は非常に大きかったという。

元々、1950 年代からのエネルギー革命に伴って大量に発生した炭鉱離職者には、国から炭鉱離職者求職手帳（いわゆる「黒い手帳」）が発給されている。黒い手帳受給者は 3 年間の雇用保険基本手当もしくは就職促進手当を受けることができ、他産業の離職者に比べて優遇されていた。そして従来の炭鉱・特定不況業種離職者に比較して高島炭鉱離職者対策が手厚かった点は、①炭鉱の閉山史上初めて組夫坑内員にも、②鉱員では坑内員だけでなく坑外員にも黒い手帳が発給されたこと、③高島炭鉱の閉山直前に石炭産業が「特定不況業種・地域雇用安定法」の指定を受けて、雇用保険基本手当の給付期間が最高 90 日まで延長されたことである。これ以外の離職者は、特定不況業種離職者求職手帳（いわゆる「緑の手帳」）を発給されて、2 年間の雇用保険もしくは就職促進手当を受けることができた。炭鉱に必要な技術は一般の建設業・製造業と大きく異なっており、炭鉱離職者の再教育プログラムは重要な対策である。高島炭鉱閉山の際にも、建築、塗装、配管、溶接などの科目を学ぶことのできる県立職業訓練学校の入校が奨励され、他の訓練校への入校の便宜も図られた（西原・齋藤 2002）。

高島における雇用の問題はどうだったのか、これはあまり上手くいかなかったのではないか、と結果的に見て考えられる。閉山時、三菱によって決定されていた新規事業は、コンクリート 2 次製品製造、ヒラメの養殖業の 2 社で、規模も大きくはなく、本格的な操業も閉山から約 2 年後と遅かった。島に働く場所がない、よって、生活が成り立たない。これが人々の

離島を促す要因の最も大きな要因ではないだろうか。1968 年にピークだった島の人口は閉山時の 1986 年 11 月には 5,491 人までに減っていた。これはエネルギー革命などによる石炭産業の衰退にも原因を発する。閉山から 1 年後には、1,988 人、さらに 1 年後の 1988 年には 1,544 人と落ち込み、その後、一定の落ち着きをみせるものの、人口減少に歯止めはかからず、閉山から 13 年後の 1999 年、11 月には 1,000 人を切り、現在 2008 年 9 月には 653 人となった。

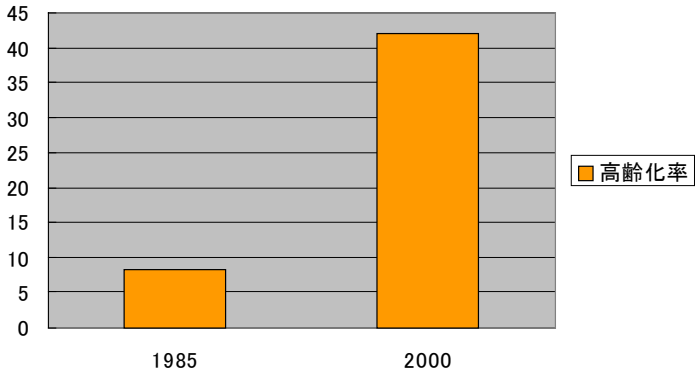

図 6　高齢化率（1985 年・ 2000 年比較）高島

資料：離島統計年報から作成

結局、三菱によって決定されていた新規事業を始め、町は新たな企業誘致に奔走し、雇用対策として民間企業誘致、第 3 セクター [15] による会社の設立を試みたが、経営難や台風災害により撤退する企業もあり、現在残っているのはトマトの栽培会社と稚魚養殖会社のみとなった。従って、島には雇用の場がなくなり、それが 20 歳～60 歳までの生産年齢層の流出に拍車をかける。結果、閉山時に人口の 60%を占めていた生産年齢層は長崎市との合併前の 2004 年には 35%までに落ち込んだ。変わりに閉山時には 9%だった高齢化率が 2006 年には 45,7%にまで上昇した（長崎県で 1 位）。上の図 6 は、離島統計年報のデータを基に作成したものである（ただし、データは現地調査で聞いたものより少し古い 2000 年のものと閉山より 1 年前の 1985 年のものとする）。

こうなると島民の購買力も少なくなり、炭鉱全盛時代から商売をしていた老舗の商店が、相次いで撤退するなど、島内で購入する店舗が数店舗しかなくなり、営業時間も短いため、長崎市内の大型店で買い物をする島民が増えている。このことが更に島内の店舗に影響を出すといった悪循環になっている。

医療についても閉山前には三菱が総合病院を運営していたが、人口の減少と共に徐々に診療科目が減り、1982 年には町立となり内科のみとなった。そして 1989 年には診療所として縮小された。これにより重症患者は島内での対応が難しくなり、救急艇で長崎市内の病院へ 30 分かけて搬送するようになって、救急医療の課題が浮き彫りになった。また、ヘリポートがあることから、Dr.ヘリの利用もあるという。

学校についても、小学校は最盛期には 3,000 人ほどの児童がいたが、鉱業所の相次ぐ合理化から閉山の流れと比例するように減少し、現在は全校生徒で 13 人となっている。中学校についても同様で、現在は 11 人の生徒数である。高校については 1989 年に閉校となり、本土の高校へ通学している状況である。

最盛期には不足していた炭鉱住宅も空き家になり、島の西側はまるでゴーストタウンのようであった。この不要住宅は全て解体され、跡地はポケットパークや果樹園等に利用されているが、跡地の一部にすぎず空地が目立つ。また、民家も空き家が目立ち、老朽化により損壊する家屋が多く、台風が来ると周囲に残骸を撒き散らし迷惑をかけている状況である。

このような背景から町では離島である特殊性に目をつけ、海洋レジャーによる交流人口の増

写真９　人口海水浴場

写真 10　飛島磯釣り公園

写真 11　稚魚種苗生産所

写真 12　高島トマト（ビニールハウス内）

加を図ろうとし、水産庁のマリノベーション拠点漁港漁村総合整備計画に乗り、1991 年に策定地域に高島が指定され、翌年計画が認定され、1993 年に着工した。この計画は磯釣り公園と海水浴場、ヨットハーバーの建設による交流人口の増加と漁港整備による水産業の振興を図ろうとするものであり、1997 年に釣り公園と海水浴場がオープンした。また、これとは別に 1998 年にキャンプ場がオープンし、これらの施設の開設により、年間３万人を超える利用者が島を訪れるようになった。

閉山後に設立されたトマトの栽培会社は､現在は市の指定管理者制度により運営されており、「高島フルーティートマト」として名声を得て高値で取引されている。また、種苗生産所は場所を漁港に移し規模を拡大して事業を行い、順調に業績をあげており、稚魚の放流事業等により水産業の振興に一役担っている。これらのことは次の節で詳しく述べる。

閉山によって、１島１町１企業という特殊な島は、人口流出に伴い商店街も衰退し、町の経済社会は崩壊した。炭鉱時代の豊かな生活と閉山後の生活のギャップは大きなものであるだろうし､過疎化の進む離島での生活、という先の見えない生活に不安を感じるという話も聞いた。しかし、閉山は悪いことばかりではなかったのだということに、聞き取り調査を通して気がついた。人は多ければ多いほど、その関係は希薄になる。例えば、高島の最盛期、中学校は、全国２位の生徒数を誇っていたという。１学年 500 人～600 人。顔の分からない人、名前も知らない人もいただろう。それが時代と伴に徐々に減少し、やがて訪れる閉山というつらい時期を共にする。仲間意識や絆は強かったという話を聞いた。炭鉱の閉山自体はいわば必然、社会や

時代の流れの中で決して逃れることのできないものであったと思われる。誰のせいというわけでもない。閉山から離島という短い、しかし濃い時間の中で共有した思い出を持っている、それだけで得がたい財産を持っているということになるのだ。

（3）現在とこれから

では、これ以降は、上でも少し触れたが、高島が閉山後どのような地域開発を行ってきたのかということをより詳しく述べたいと思う。

現在、高島の主要な産業は「高島フルーティトマト」と呼ばれるトマトと、ヒラメ・トラフグ・カサゴなどの稚魚の生産と販売である。後者の種苗生産センターの業績は島内で唯一の黒字だという話も聞いた。その他、海水浴場やキャンプ場があるが、これは夏場に繁盛期を迎えるため、時期を過ぎると人はあまり訪れない。実際、町の商店街やスーパーは 7 ・ 8 月で 1 年間の主な売り上げを上げるのだそうだ。その時期には定期船の臨時便も出るほどの盛況振りである。町の食堂でいろいろと聞いた話の中にも、夏はとにかく忙しい、ということがあった。グランドやテニスコートがあるため、夏場は日帰りの客の他、小中高生の部活の合宿にも利用される。余談ではあるが高島小中学校では児童・生徒数が少ないため、部活を多数作ることができない。そのため、バドミントン 1 つに部活を定め、結果を残している、という話を合宿などの話に関連して聞いた。飛島釣り公園にはぽつぽつと釣りを楽しんでいる人が見られた。大物が釣れるのだそうだ。島で行われているイベントとしては市が町の頃より実施していた「UMIBOUZ　IN　高島」という海水浴場で夏休み期間に実施するイベントで観光客の誘致を図っていて、最大 1,200 人程の参加者がある。高島いやしの湯という海水温浴施設は、海水を使った温浴療法を売り物に月に 4～5 回、海水温浴プールを使って専門のインストラクターによる健康指導教室を実施しており、これには島外からの参加者もいるそうだ。この温浴施設は現在、市の直営で運営しているが、将来は指定管理者制度に移行していくことを視野に入れている。

以下では高島の現在とこれからを考える上で重要と思われる高島フルーティトマト、長崎市との合併、島の主要事業計画について述べたい。

●高島フルーティトマト

「食通垂涎の絶品トマト」。そう謳われる高島フルーティトマトは高値であるにも関わらず、販売開始からすぐに売り切れになってしまうほどの高い人気を持つトマトである。ファーストトマトという品種で、小ぶりではあるがずしりと重く（水につけると沈むのが特徴）、糖度が高い。通常のトマトだと 3 ～ 4 度である糖度が、高島フルーティトマトだと物によっては（特選だと） 9 ～10.9 度になるという。これは永田農法 [16]（スパルタ農法）と呼ばれるトマトの原産地南米ペルー・アンデスの自然条件に近い畑で、最小限の水と肥料で栽培されるトマトである。そのトマトが崎長海運株式会社高島トマ

写真 13　高島商店街

ト事業部によって栽培、販売されている。

高島のトマト販売は、高島炭鉱閉山後の 1989 年度に、閉山後の雇用対策である第 3 セクターの事業として取り組まれたのが最初である。そして、2005 年の高島町と長崎市の合併後には、市がこの事業を引き継ぎ、まもなく民間会社「崎長海運株式会社」の「高島トマト事業部」が指定管理者 [17] となり市から農地と施設を借り受けて事業を引き継いだものである。ただし、指定管理者制度によって運営されているものであるため、赤字であったとしてもその責はすべて会社が請け負うことになる。現在のトマトの業績は残念ながら赤字である。トマトを待っている人がいるとはいえ、来年、つまり次のシーズンに黒字にもっていかないと撤退という言葉さえ浮んでくる厳しい状態でもあるのだ。

写真 14　高島フルーティトマトジャム

先ほど、永田農法（スパルタ農法）という言葉が出てきたが、実際はスパルタでもなんでもない、と高島トマト事業部の蔵治さんは言う。最近流行りなのは有機栽培であるが、高島のトマトは無機栽培である。ただ、無機とはいっても多少の肥料は使わなければならないし、土の温度を上げ、連作障害をなくし、雑菌を殺すために、収穫前には石炭チッソを散布したりはする。要は、スパルタ農法とは、最小限の水と肥料で育てることで、トマトの自ら生きる力を高め、熟させる方法なのだ。この農法の問題点といえば、コストとトマトの収量だろう。永田農法ではトマトは普通のトマトの収量の半分しか採れない。しかし、肥料代と害虫防除にビニールハウスの中を暖めるために必要な油代など必要な経費は大きい。よって、トマトの価格も倍以上になってしまうわけである。それでも購入していく顧客はいるのだが、一番の買い手は島民、2 番目は長崎市内、3 番目は注文販売の顧客（1,000 人）というのが現状である。今後はいかに顧客を増やしていけるかにかかっているのではないだろうか。尚、高島のトマトは池袋の三越などにも置いてあったことがあるらしいという話も聞いた。

永田農法によるトマトの栽培は非常に難しい。「水のやり方 1 つとっても、完全に習得するまで最低でも 10 年はかかる」というほどである。それに加え、栄養分の少ない赤土を運んできて試験的に使ってみるなど、トマトの色付きをよくしたり、連作障害を起こさないようにするための工夫や努力を欠くことができない。赤土が海に流れ出て、海が赤くなってしまい、島民を驚かせたこともあるという。大変“気難しい”トマトなのだ。

トマトの栽培は、閉山後の雇用対策として一足早く永田農法でトマトを栽培していた大島にヒントを得て始まった。一年中比較的温暖な気候で、霜が下りることがなく、太陽が豊かで、海から流れ着いた海藻などを上手く使ってミネラルや塩分を畑に与えることのできる高島はもともとトマトの栽培を始めるに当たって地の利があった。大島トマトは高島トマトよりさらに小ぶりで酸味があまりないのが特徴であるらしい。高島ではそれを少しアレンジして、程よい酸味を残しているという。しかし、2 つの島は競争しているのか、と思いきや、そうではない。いいものを作るために技術交流をすることによってお互いに協力しつつトマトの栽培をしているらしい。永田農法という一般の農家ではできない農法を使ってトマトを栽培し、“暴れる”トマトをおとなしくさせる、また、直売をするときに「これはうまか」と顔を綻ばせる消費者

の顔を見る、そんなときにトマトを作っているやりがいを感じるのだという。

また、高島ではトマト大感謝祭というイベントを毎年 6 月に行っている。この時期は 1 月～5 月が収穫時期である高島トマトの収穫も終わりに近づく頃で、内容は、トマトの採り放題、食べ放題というものである。感謝祭ではトマト狩りだけではなく、高島小学校の子どもたちによる歓迎セレモニーから始まり、島外からギターリストを招いたり、高島さるくを行ったりと、訪れた人が 1 日中楽しめるようになっている。参加者はやはり県内の人ばかりだというが、高島トマトがより有名になれば他県からやってくる人も出てくるのではないだろうか。

蔵治さんは今後、高島トマトを使って何かできないか、ということ考えていると話してくれた。今、島には U ターンで戻ってきた 20～40 代までの島民が 10 人程いるという。島を活性化させていくのはその人たちにかかっているともいえるが、現在は公共事業や夏季の繁盛期の海水浴場での出店などで生計を立てている状態ということらしい。どんなに良い発想があったとしても、“自分の経済が成り立たない限り、絵空事”であり、やはり、雇用の少ない離島の地域活性化は厳しいのだ、ということを感じさせた。現在、取り組んでいるのは、トマトを使った加工品を作って販売する、というものである。農作物を作っていれば、必ず、市場に出せないような物も出てくる。そういったものを使ってトマトピューレーやジャムなどの加工品を作るのだ。筆者は、高島では見つからなかった高島トマトのジャムを伊王島で見つけた。おそらくこれは訪れる人が伊王島のほうが多いからなのだろう。また、レストランを開く、などの構想も考えているという話も聞けた。実際に有名なシェフによる特別料理賞味会に高島のトマトが使われたことがあるらしい。そう聞くとレストラン、とまではいかなくても、有名な料理店にトマトを使ってもらう、などの可能性もあることが分かる。普通のトマトの栄養価の 3 倍はあり、成人病の予防になる（現在癌に効くかどうかは実験中）という高島のトマトは今後の高島にとって、多くの可能性を秘めているともいえる。

●長崎市との合併

長崎市との合併で高島が受けた影響にはどのようなものがあるのか。

・公共料金の値上げ（水道、下水道、市営住宅を長崎の水準に引き上げ）

この時に問題となったのは公衆浴場とバスである。炭鉱時代の節でも触れたが、高島では公衆浴場を利用してきた。よって、風呂がない家も多い。以前は 2 つあった公衆浴場であるが、2007 年 3 月に 1 つが廃止になってしまい、現在は高島港近くにある、海水温浴施設内に設置してある浴場のみになってしまった。困ったのは撤廃された浴場の利用者である。65 歳の男性が“おにいさん”と呼ばれるほど高齢化が進んだ高島町の住民にとって、毎日、少し離れた浴場に通うのは体力的に厳しい。しかし、合併する前に高島町の方針として新たな浴場は作らないと決定してしまったため、それを覆すのは難しく、結局、公衆浴場の料金を 200 円から 100 円へ、また、バスの料金も 200 円から島内どこでも 100 円へと値下げすることでとりあえずは落ち着いた。バスは、一応決められたバス停はあるものの、手を上げたら停まってくれたり、好きなところで降ろしてくれるといった融通も効くとのことだ。

・公共事業の激減（島内事務所の撤退、縮小）

・釣り公園入園料、キャンプ場使用料の値下げ（町民料金は元々半額であったが、合併後に町民以外の者を町民料金に合わせたため収入が半減）

・ごみ搬出日の減少（これまで週 3 回の生ごみ搬出日が週 2 回となる）

・草刈場所の限定（合併前はどこでも草刈をしていたが、合併後は市道周辺と公園しか草刈をしなくなった――縦割行政の影響）
・行政職員の減少（役場から行政センターへ移行したため職員数は半数以下に減少し、その半数以上は本土から通勤している。これらを常連客としていた食堂などの売上は激減）

町役場時代は、職員は島内在住しなければいけなかったが、合併により通勤が可能となった。よって現在の通勤者は 16 人中 8 人だそうだ。そのため、台風などの非常時に船が欠航すれば、地域住民の安全確保にあたる行政センター職員が従事できないケースが想定されることとなった。現在は台風の規模に合わせて対処、つまり泊り込みなどを行っている。高島町では、台風などの接近により避難所を開設すれば、高齢者や足の不自由な人などを車で迎えに行って避難させていたが、このことについても職員数の減少により段々と対応が難しくなってきているという。

・教職員の島内不居住（合併前から数名の通勤者がいたが、合併後はほとんどが通勤している。行政職員の減少と併せ、自治会行事等への参加や、体育クラブへの参加がなくなり、住民との交流がほとんどなくなった）

高島小中学校で聞いた話によると、合併でさらに生徒数が減ったらしい。小学校は複式学級[18]で授業をしている。中学校も学級としては複式、授業は学年ごとに行っているそうだ。給食は児童・生徒・教師全員でランチルームに移動して食べる。人数は少ないが、教師と生徒との距離が近く、細かなところまで目が行き届くのが良いところだろう。アポイントもなしに突然来た筆者にも元気に挨拶をしてくれる、明るい雰囲気の学校だった。

いろいろと不都合なこともある反面、合併により、行政が手を引いたことで、これまで行政主体で行っていたものを民間の団体が引き継いだり、自主的に新たなものを行う部分も見られるようになったらしい。この例が上にあげたトマト感謝祭や長崎さるくである。

●今後の主要事業

1．高島地区に居住する世帯の半数は、老朽化した公営住宅や改良住宅に居住しているため、住宅の建替えによる浴室の設置や、バリアフリーなどによる高齢化対策を行う。
2．島外転出により廃屋となった住宅の老朽化により、通学路や地域住民に被害を及ぼしそうな住宅の無償譲渡[19]による除去を行う。
3．海水温浴施設、デイサービスセンターなどを活用した福祉・保険・医療体制の充実により、

写真 15　高島小中学校

写真 16　学校通学路の一部

高齢者や地域住民が健康で安心できる生活環境の整備を図る。

４．ながさき暮らし事業の推進による交流人口の受け入れを図る。

現在の市の施策は交流人口の増加に重点を置いており、そこそこの効果は上がっているが、根本的な島の再生には至っていない。

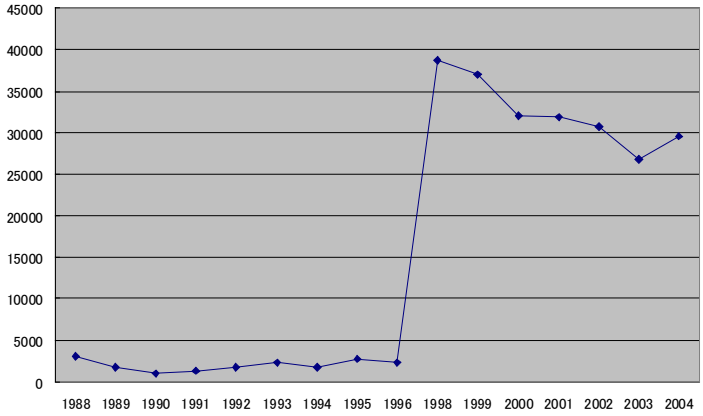

図７　高島の観光客数の移り変わり（1988 年～2004 年）

資料：離島統計年報から作成

下の図７は、離島統計年報のデータから作成した高島に訪れる観光客数の移り変わりをあらわしたものである。1996 年から 1998 年の間、つまり、釣り公園と海水浴場がオープンした年から急激に観光客数が伸びている。しかし、これは夏季のみという限定的な要素が加わっており、その事実が根本的な島の再生に至っていないと結論づかせる一番の理由だろう。定住策として 2006 年度から「ながさき暮らし推進事業」（詳しくは次の節の伊王島のところで述べる）として合併地区を対象として定住策が実施されているが、問い合わせはあるものの実績に至っていない。老朽化の廃屋については、土地の無償譲渡とあるが、真の所有者が誰なのか分からなかったりするため、なかなか上手くは進まないという話も聞いた。交流人口については、伊王島までは年間 10 万人を超える観光客が来ているので、これらを高島まで足を延ばしてもらえるような施設整備、ソフト事業を行い、また、整備が始まった端島を抱き込んだ事業の展開によって増える要素はあるという。

長崎市の活性化対策としては、高島の振興策として夏の観光をメインとした、観光レクリエーションの振興を図ることによる、交流人口の拡大を基本方針として、航路の充実と高齢者が安心して暮らせる体制の整備に努めることとしている。高齢者が安心して暮らせる体制、に関わることであるが、実際、話を聞いた中で、高島は高齢者が安心して暮らせる島にしていけばいい、という意見を聞いた。車通りも少なく、のんびりとした島で、気候も穏やか、隣人同士の交流も都会に比べて濃い。しかも、離島という環境であるため、補助金が出るというメリットもある。その方向で今後の島を変えていくのも 1 つの開発だろう。ちなみに端島に関する事業であるが、今は上陸できない端島に来年、2009 年 4 月か 6 月には上陸できるようになる予定らしく、昔、端島で暮らしていた人を始め、多くの人が非常に楽しみにしているのではないだろうか。

３．伊王島

以下、伊王島行政センター、長崎市商工会館でお聞きしたお話や頂いた資料をもとに文章を作成する。

（１）リゾート開発と伊王島

次頁の年表を見ても分かるように、伊王島は高島に比べ、開催されるイベントが数も種類も

表３　伊王島年表

1985(昭和60年)	「伊王島開発基本計画」調査開始
1870(明治3年)	江戸条約の規定により、日本最初の灯台の一つが建てられる
	伊王島灯台竣工初点灯
1871(明治4年)	伊王島・沖之島が長崎県の直轄となる
1889(明治22年)	町村制施行により伊王島と沖之島を合併、「伊王島村」とし初代村長に吉田清蔵氏がなる
1890(明治23年)	伊王島村立小学校ができる
1898(明治31年)	沖之島小学校ができる
1911(明治44年)	沖之島小学校を硫黄島小学校に合併
1918(大正7年)	伊王島実業補修学校創立
1919(大正8年)	小学校に高等科がおかれる
1924(大正13年)	大波止～伊王島　定期航路始まる
1935(昭和10年)	松村茂氏によって石炭が発見される
1941(昭和16年)	炭鉱開鉱
1944(昭和19年)	石炭の初積み出しが行われる
1947(昭和22年)	伊王島中学校ができる
1950(昭和25年)	炭鉱職労婦人の会発足
1952(昭和27年)	坑内自然発火発生
1953(昭和28年)	鉱員主婦の会発足
	嘉穂が長崎鉱業と合併
1954(昭和29年)	嘉穂長崎鉱業が日鉄と合併、日鉄鉱業KK伊王島となる
1958(昭和33年)	仙崎鉱員アパート5棟竣工
	海底水道管布設工事完成
1962(昭和37年)	町制施行　(1748世帯、人口7300人)
	町営バス運行開始
1965(昭和40年)	坑内ガス爆発で30名の死者が出る
1968(昭和43年)	黒潮灯台点火
1971(昭和46年)	伊王島灯台無人化し、小ヶ倉航路標識事務所の管理下に入る
1972(昭和47年)	日鉄伊王島炭鉱閉山、人口が減少する
1976(昭和51年)	長崎汽船、高島商船合併
1978(昭和53年)	社会福祉法人伊王島町社会福祉協議会発足
1979(昭和54年)	伊王島灯台が新観光地となる
1980(昭和55年)	伊王島開発総合センター竣工
1981(昭和56年)	町営バスに自由乗降バスとしての認可
1982(昭和57年)	炭鉱閉山10周年記念
	町立中央保育園休園　純心聖母会「伊王島幼稚園」のみとなる
	「伊王島灯台旧吏員退息所」が長崎県文化財指定を受ける
1984(昭和59年)	伊王島灯台公園完成
1986(昭和61年)	「伊王島町行政改革大綱」策定
1987(昭和62年)	第1回長崎オープンヨットレース開催
1988(昭和63年)	第2回長崎オープンヨットレース開催
	伊王島スポーツリゾート開発(株)設立
1989(平成元年)	第3回長崎オープンヨットレース開催
	「ルネサンス長崎・伊王島」オープン
1990(平成2年)	第4回長崎オープンヨットレース開催
	地域づくり全国大会で国土庁長官賞に輝く
	伊王島灯台120年フェスティバル、記念式典
1991(平成3年)	第5回長崎オープンヨットレース開催
1992(平成4年)	第6回長崎オープンヨットレース開催
	キイレツチトリモチ[20] 群生地が天然記念物(町)に
1993(平成5年)	平成4年度全国町村会優良町表彰を受賞
	「ヴィラ・オリンピカ伊王島」オープン
1994(平成6年)	旧大明寺教会、愛知県明治村へ移築
	「第1回優秀観光地づくり賞」受賞
1995(平成7年)	新しい「伊王島の歌」完成
	「第1回ペーロン大会」開催
1996(平成8年)	伊王島スポーツリゾート開発(株)「地域づくり自治大臣表彰」受賞
	「第12回長崎レディースロードレース」開催
	「第107回九州地方知事会議」が、ルネサンス・長崎伊王島にて開催
	新館ホテル「エスパーニャ」オープン
	第10回長崎オープンヨットレース開催
	「第2回ペーロン大会」開催
	「レゲェジャパンスプラッシュ‘96イン九州」開催

表３　伊王島年表（続き）

1997(平成9年)	「第14回長崎レディースロードレースRUN・RUN伊王島」開催
	伊王島大橋架橋事業着手
	第1回瀬戸まつりシーカヤック大会開催
	「第52期本因坊戦の挑戦手合7番勝負第3局」がルネサンス・長崎伊王島にて開催
	「第3回ペーロン大会」開催
	「レゲェジャパンスプラッシュ‘97イン九州」悪天候により中止
1998(平成10年)	池下守町長「地方自治体賞　奨励賞（毎日新聞）」受賞
	（炭鉱の町からリゾートの町への再生に貢献）
	「第4回ペーロン大会」開催
	「レゲェジャパンスプラッシュ‘98イン九州」開催
	「第1回・第2回伊王島離島塾」開講
	リゾート立町10周年式典挙行
1999(平成11年)	「伊王島町総合計画」策定
	「第3回・第4回伊王島離島塾」開講
	「第5回ペーロン大会」開催
	芝生公園にて「桜のオーナー記念植樹会」開催
2000(平成12年)	「第5回・第6回伊王島離島塾」開講
	「伊王島海水浴場コスタ・デル・ソル～太陽の海岸～」オープン
	「第6回ペーロン大会」開催
2001(平成13年)	伊王島海水浴場のシンボル「小島」の護岸整備完成
	「第7回伊王島離島塾」開講
	「第7回ペーロン大会」雨天により中止
2002(平成14年)	「ホテル　エスパーニャ」閉鎖
	伊王島大橋取付道路「香焼トンネル」貫通
	「第8回ペーロン大会」開催
	「第1回長崎地域合併会」開催
	「第8回伊王島離島塾」開講
2003(平成15年)	下水道が供用開始
	「やすらぎ伊王島」オープン
	「第9回ペーロン大会」開催
	伊王島灯台「鉄造6角形様式灯台」に復元
	「第5回全国自然塾大会」お伊王島町にて開催
	「長崎温泉　やすらぎ伊王島の湯」湧出
	池下守町長「国土交通大臣賞」受賞（離島振興に貢献）
2004(平成16年)	「やすらぎ伊王島」グランドオープン
	「第9回・第10回伊王島離島塾」開催
	「第10回ペーロン大会」開催
	「合併記念　お楽しみ演芸会」開催
	閉町式
2005(平成17年)	近隣５町と共に長崎市と合併

写真 17　伊王島港

写真 18　伊王島（住宅部）

多く、それに伴い訪れる観光客数も多い。また、図８は、離島統計年報をもとに作成した高島と伊王島の観光客数を比較するものである。これを見れば 2 つの島の間に大きな違いがあるのが良く分かる。伊王島は炭鉱が閉山してから一体、どのような開発を行ってきたのだろうか。

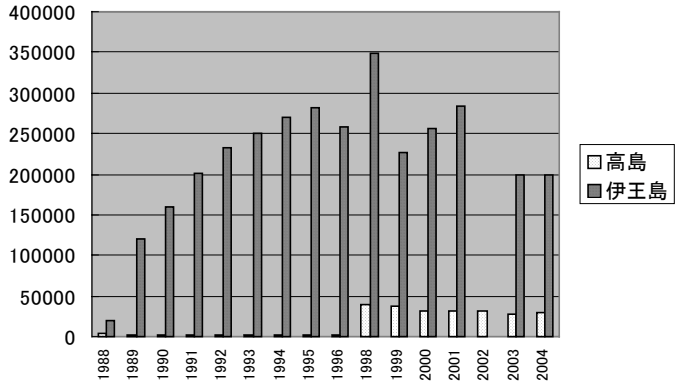

図８　高島・伊王島の観光客数

注：1988 年～2004 年　伊王島 2002 年分は欠損

資料：離島統計年報から作成

「体感！ココロとカラダが元気になる伊王島～やすらぎのリゾートアイランド～」これは長崎さるくのパンフレットに使われている謳い文句である。ここにあるとおり、長崎市港ターミナルから高速船で 19 分、船を降りれば、スペイン風の町並みのリゾート地が広がっている。

1972 年の炭鉱閉山以降、離島・過疎・旧産炭地という三重苦の厳しい状況の中、町民の雇用確保と所得の向上など、住民の生活の向上を図るためには、産業の振興が大きな問題であり、企業誘致に取り組んだが、離島であるがために進展をみなかった。しかし、伊王島のポテンシャルを最大限に活用した産業の振興がどうしても必要であると判断し、地元がリーダー役となり、リゾート開発の推進を決定した。そして、地元企業の協力、県の支援により、1988 年 6 月に第 3 セクターとして「伊王島スポーツリゾート開発（株)」を設立し、1989 年 7 月に宿泊施設とスポーツ施設をメインとする「ルネサンス長崎・伊王島」がオープンした。その後、2002 年に一時閉鎖するものの、翌年 2003 年 3 月に伊王島町が町有財産として取得、同年 7 月「やすらぎ伊王島」として再開した。2005 年には市町村合併により長崎市がそれを承継した。以上が伊王島のリゾート開発に至るまでの経過である。上記した伊王島のポテンシャルは以下のようなものである。

・長崎市へ高速船で約 20 分の距離にある
・伊王島大橋建設の着工により近くなり、将来本土化する
・年間約 40 万人近くの来島者がある
・風光明媚な自然
・歴史文化遺産が多い
・人情豊かなやさしい風土

やすらぎ伊王島は年々業績を上げ、2007 年の時点で黒字だという話を聞いた。伊王島も高島と同じく学生の合宿などを受け入れており、合宿場として使用できる施設を備えている。

また、伊王島は高島に比べ、炭鉱の跡が残っていない。歴史的資産といえば、炭鉱というよりもどちらかといえば灯台などの方に重きを置いている気がする。これは閉山当時の町長の方針であったという話を聞いた。観光一直線であった伊王島は炭鉱のイメージを払拭するため、

跡は全て取り壊したのだという。そのせいもあってか、伊王島にはすぐさま取り壊さなければならないような廃屋もなく、各家庭に風呂も備わっているため、公衆浴場もない。

伊王島ではながさき暮らし推進事業にも特に力を入れており、実際に２軒の体験宿泊施設や、実際に移り住んで生活をしている方の家を見てきた。体験宿泊は 10 泊 11 日、１泊 5,000 円だそうだ。この事業は、2006 年から開始された、県外から住民票を長崎市に移動してくれる団塊の世代を主な対象に選んだ事業で、今後もよい成果を上げていけることが大いに期待されている。長崎市との合併に関しては高島のところでも述べたので特記することはあまりないが、伊王島に今後、大きな影響を与えるのは次に述べる伊王島大橋に関してのことだろう。

（２）今後

●伊王島大橋

今後の伊王島を大きく変えていくのは伊王島大橋の完成によって本土と陸続きになるという点だろう。橋が架かることで、現在高速船を利用して本土から伊王島へ通勤している人たちは今より楽になるだろうし、島からの通学や通院もしやすくなるだろう。しかし、問題もある。伊王島は交通事故のない島で、わざわざ島外から子どもの自転車に乗る練習をするために伊王島に訪れる人がいるくらい、安全な場所である。よって、伊王島大橋が完成することによって増えると予想される交通量に島民は不安を抱いているらしい。静かに暮らしたいというのが島民の願いなのである。観光客に関しても、船に 20 分間乗って島へ来る、というのも魅力の１つであり、伊王島大橋自体、開発目的で作られるのではないのだというが、やはり、島の住民の願いと利便性が衝突する可能性があることは完全には否定できないのではないか。また、橋が架かることで伊王島は離島という枠組みの中から外れることになる。行政や予算のほうも変わることが予想される。また、高速船の利用者は確実に減少するだろう。現在でさえ赤字の航路である。便数が少なくなるのか、船の規模が縮小されるのかは船会社次第であるので分からないが、高島で生活している人のことを考えると航路自体がなくなるとは考えにくい。一体、島は今後どう変わっていくのだろうか。

●今後の展開

伊王島町が総合計画に掲げる「リゾートこそ最良の定住地」との考えのもと、交流と定住を併せた「ハイブリッドリゾート伊王島」を目指し、民間（企業）と、行政そして住民が一体となり、島全体を生かしたリゾートの町づくりを目指していくこととするが、少子・高齢化社会やインターネットに代表されるように高度情報化社会が進み、さらには地方分権が実行段階を迎えた今、その受け皿となる市町村は、主体的、自立的な企画力、展開力をもって、対応していかなければならないとのことである。以下、伊王島の今後の新しい事業展開を挙げる。

１．インターネットを利用した情報発信
２．自然と共存する環境基盤整備（全島公園化事業等）
３．交流だけでなく定住の発想を取り入れたリゾートの町づくり
　（別荘開発による半定住人口の確保等）
４．年間を通したイベントの実施による誘客
５．町並み修景（景観条例の制定など）
６．独自の事業展開による収入の確保（海水浴場運営等）

現在、伊王島は、夏の観光客の動員だけではなく、温泉や企画が季節ごとに変わる料理などによって秋・冬の利用客を徐々に増やしていっている。温泉に入って、船賃込みで 980 円という割安感が多くの観光客を呼んでいる。

Ⅳ　高島・伊王島・池島を比較して

以下は、３島のキャッチフレーズである。

「石炭を魚にかえて島おこし」―――高島

「リゾートこそ最良の定住地」―――伊王島

「炭鉱の島・池島探検！」　　―――池島

このことからも 3 島の違いが良く分かるだろう。そこで、高島と伊王島の開発の違いに加え、池島という、また 2 つの島（特に伊王島）とは対照的といってもいいほどに違う開発の方法をとった旧産炭地の例も挙げつつその違いを述べていこうと思う。

表４　比較年表（高島・伊王島・池島）

年	高島	伊王島	池島	日本経済
1695	石炭発見			
1710	事業化			
	―炭鉱時代の幕開け			
1868	佐賀藩、グラバー商会と契約			
1874	いったん官営になった後、後藤象二郎に払い下げられる			
1881	三菱社の岩崎弥太郎が買収			
	―日本初の近代的炭鉱として発足			
1935		石炭発見		
1941		炭鉱が開かれる		
1945				第2次世界大戦終結
				財閥解体
				日本経済復興期
1952			松島炭鉱が海底炭の発掘に着手	石炭がエネルギー供給の中心に
1959			炭鉱操業開始	（炭主油従政策）
1962				高度経済成長期
1966	石炭量ピークに			エネルギー革命
1972		炭鉱閉山		石油が石炭を抜いてエネルギー供給首位に
1973				第1次石油危機
1979				第2次石油危機
				経済安定性長期へ
1985	ガス爆発事故			プラザ合意
1986	11月27日			
	三菱石炭鉱業高島砿業所閉山			
1987				バブル経済
1989		スポーツリゾートの島として地域再生		
1990				バブル崩壊
				経済不況へ
1997	飛島磯釣り公園			
	海水浴場　オープン			
2001			閉山	
			以後、国による「海外技術移転5ヵ年計画」	
2002	風力発電施設　完成			
2003	多目的グラウンド			
	海水温浴施設　完成			
2005	1月4日　長崎市と合併			

では、なぜ開発の仕方に違いが生じたのか。高島、伊王島、そして池島、開発の違いはどこにあったのか。様々な理由が挙げられるが、やはり、

・閉山の時期の違い

・島の位置（乗船時間・船賃）　高島　片道 35 分 990 円（高速船）
　伊王島　片道 20 分 650 円（高速船）
　池島　片道 30 分 430 円（フェリー）
　片道 15 分 580 円（高速船）

・閉山当時の町の代表者の方針

・民間企業の参入

が主なものだろう。

表４を見ても分かるように、伊王島は３島の中でも最も早く閉山し、バブルが崩壊する前にリゾート開発の事業を興した。当時の町長の方針というのも、この頃の時勢が深く関わっているのではないか。それに対し、高島は閉山してからすぐに企業誘致が上手くいかない中、不況の時代へと入っていった。池島に関しては、３島の中で最も閉山が遅く、九州最後の炭鉱であるということ、世界唯一の海底石炭基地であることなどから、解体するよりも残す方を選択した。技術の伝承を行う上でその施設を保存しており、それを利用して石炭産業の意義を後世に伝えようと観光ルートとなった。3 島が選んだ方法はそれぞれ時代をよく反映していると考えてもいいだろう。

また、民間企業の参入であるが、高島の土地は三菱が全て市へと譲渡したため、現在は市のものであるが、伊王島はまだその４割が日鉄のものである。また、池島も、現在行われている『池島』体験プログラムは三井松島リソーシス株式会社によって運営されているものである。よって、炭鉱以外の用途で開発しようとした高島と伊王島であるが、高島が行政主導で施設整備や事業を行ったのに対し、伊王島では民間の大手資本が参入し、民間主導で観光開発に当たった。また、高島ではいくつかの施設を整備し、来島者が増えてから段階的に施設を整備しようとしていたのに対し、伊王島では宿泊施設まで完全に整備してから観光客を呼びいれようとしたところに違いがあり、施設整備が難しくなった今、その違いが出ていると考えられる。

Ⅴ　まとめ

この調査をするまで、地域開発というものは、その地域の経済的な利益を重視したものであり、経済的に豊かであればそこで生活する住民も豊かな生活を送れると考えていた。だから、調査をしようと思っていた内容も、炭鉱が閉山してからその地域がどのような経緯を経て今に至るのか、3 島の違いが分かればいいと考えていた。しかし、島の人と実際に関わった時からか、行政センターの職員が島の人の安全のために働いているのを見たときからか、高齢者が暮らしやすい島にしていけばいい、という話を聞いたときからか、それともその全てが関わっているのか、そこで暮らす“人”のことをもっと知りたいと考えるようになった。伊王島大橋にしても、どんな開発にしても、利害のことだけ考えていれば、ただ、作ればいい。しかし、そこに“人”が関わっているからこそ、問題が生まれてくるのであるし、開発に違いが出てくる。そんな当たり前のことに今更ながら気がつかせてくれたのが今回の調査だった。

高島で掘れば出てくるであろう温泉を掘らなかったのは何故か。高島と伊王島の町長同士が仲が良かったからである。高島・伊王島・池島の 3 島の開発の違いはどうして生じたのか。

この答えは第Ⅳ章に報告した通りで間違いはないと筆者は考えている。だが、そこには人の絆や関係が深く関わっていると思うことはいけないことだろうか。旧産炭地の開発は、その土地に、そこで暮らす人々に愛着があるからこそ、その土地の人たちによって進められてきたのだと思いたい。

謝辞　この度は調査に協力して頂き、大変感謝しております。また、突然お伺いするというような無礼も許して頂いた上、親切に対応してくださり、ありがとうございます。未熟者であるため、頂いた資料を十分に生かすことができたかどうかは疑問であり、また、記述や認識に間違いもあるかもしれません。そのときはどうぞご指摘くださいますようお願い致します。尚、文章中で敬語、敬称を省略させて頂いたことをここでお詫び致します。

注

1）以降、炭鉱の鉱の字は「鉱」で統一することとする。

2）但し、池島に関しては現地調査を行うのが時間的に難しかったため、資料のみの調査とする。

3）トーマス・グラバー（1838～1911）は、英国の貿易商である。1859 年長崎に来日。1861 年グラバー商会を設立し、はじめ日本茶などを輸出していたが、のち西南雄藩ほか幕府諸藩に武器弾薬、軍艦を売り巨利を収めた。また五代友厚ら薩摩鹿児島藩のイギリス留学生を仲介、薩英提携、薩長同盟成立にも重要な役割を果たし、佐賀藩に高島炭坑の採掘資金を貸し付けたり、長崎造船所(のち三菱造船所)の前身小菅ドックの設立にも参画した。

4）後藤象二郎は、明治の政治家である。土佐高知藩の出身。公議政体論を唱え前藩主山内豊信に大政奉還を建白させた。明治政府では参与、参議を歴任したが征韓論に敗れ、西郷隆盛、板垣退助とともに下野。副島種臣、江藤新平らと愛国公党を組織し民撰議員建白に参画、1881 年板垣退助らと自由党を結成。1887 年大同団結運動を起こしたが政府に買収された。1889 年以降逓相、農商務相を歴任した。

5）岩崎弥太郎は、三菱財閥の創設者である。土佐の地下浪人の家に生まれ、同藩の吉田東洋や後藤象二郎、坂本竜馬の知遇を得る。同藩の経済官僚を経て海運業を営んだ（三菱会社)。大久保利通、大隈重信と結び、政府の手厚い保護を受けて海運業における独占を確立した。のち三井系の共同運輸会社との商戦の途中で病死。弟の岩崎弥之助が後を継いだ。

6）マリノベーション marinovation とは、マリン（海）とイノベーション（革新）を組み合わせた造語で、第 4 次全国総合開発計画に基づき 1985 年に決定され、水産庁が 21 世紀を視野に入れて実施した沿岸沖合域総合開発地域整備推進事業をいう。基本的には、大規模な水産都市の整備および沖合資源の増大と安定化を目標とするマリンコンビナート構想、先端技術導入のための研究開発を行うマリンテク構想、準漁村地域の生活環境整備と栽培漁業を推進するマリンビレッジ構想、海の文化の継承と漁場環境の保全を目標とするマリンカルチャー構想の 4 本の柱で成り立つ。1990 年には新マリノベーション構想が決定された。新構想では、水産業関係だけでなく一般人を対象に、海に親しんでもらうためのブルーツーリズム構想を加えた。これは、釣り場・レジャーボートの・係留所・魚の販売所・レストランといった親水施設を整え、海や漁業とのふれあいの場を積極的に提供しようとするもので、全国 50 の地域の指定が決定している。

7）労働者を納屋と呼ばれる合宿所に収容し、請負業者たる納屋頭や小頭の日常監視による身分的拘束の下に半強制的な労働に従事させた制度。明治期の鉱山などに広くみられた。これに関連して高島炭鉱事件というものがある。明治初期、長崎の高島炭鉱坑夫虐殺事件。三菱経営化の過酷な労働条件と納屋制度に反対して、1878 年には賃上げ要求の坑夫が暴動化、100 余人が逮捕された。さらに、体験者が 1888 年雑誌『日本人』にその実態を発表し、三宅雪嶺が「三千の奴隷いかにすべきか」との批判をのせて訴えた。政府は清浦奎吾警保局長を派遣したが、打開策もなく終わった。

8）都市計画の基本法。（1968 年公布、1969 年施行）無秩序な市街化による都市環境の悪化と公共投資の非能率化を抑止するため、都市の健全な発展と秩序ある整備を図るのを目的とする。都市計画の決定・変更、都市計画事業の認可・施行などにつき規定。旧法（1919 年）を全面改正したもの。

9）緑なき島：1948 年製作、松竹配給。石田清吉の製作で、八木保太郎の原作から長崎県五島出身の清島長利が脚本し、演出は小坂哲人。現地撮影の際、三菱鉱業、高島鉱業所、端島職員組合、および端島労働組合が協力している。尚、端島を舞台にした作品には他に小説で内田康夫の『棄霊島』がある。

10）離島振興法によって定められた地域。離島振興法とは、離島の後進性と基礎条件を改善し、産業振興対策を行うための法律（1953 年）。首相による離島振興対策実施地域の指定、首相・知事による電力・道路・漁港・教育・厚生等の振興計画の作成、事業の実施および助成方法等を定める。

11）水源は野母半島の三和町付近の 5 本の堀井と長崎市の鹿尾水系からのもので、三和町為石浄水場を経由し、海底に 6,500ｍの長さの水道管を敷設して端島および高島へ給水する公事業。水の制限がなくなったことで、水の使用量が一気にはねあがり、今度は水源の確保が問題となる。昭和 35～37 年の 3 回にわたる水源地の拡張工事でもその需要に追いつかず、1967 年の 4 度目の拡張の際に、貯水能力 10 万トンの為石貯水池が完成した。

12）産炭地域とは、石炭産業の不況により経済的社会的に疲弊している石炭産出地域及び隣接する地域のうちから、鉱工業等と密接に関連する地域であるとして指定されるもの。産炭地域振興臨時措置法は 2001 年に失効している。

13）広域行政圏。広域行政とは現行の都道府県の区域を超えた、より広範な地域を単位として行われる行政。国民経済の発達に伴う交通整備、資源開発、産業振興などの面からその必要性が高まっている。対策としては中央官庁の出先機関の強化もあるが、重点はむしろ道州制・地方制のように行政区域の広域化におかれている。首都圏整備法などはその過渡的措置ともいえる。ときに個々の市町村の区域を超えた広域にわたる行政を都道府県が行うという場合にも使われる。

14）端島・高島では、生活用水は対岸からの運搬水、天水のほか、1886 年（明治 19 年）からは海水から蒸留水を採って飲料水としてきた。このとき、蒸気ボイラーに海水を使用しているため、その過程でかん水（塩分濃度の高い水）が排出されるので、これを原料として蒸気熱を加え水分を蒸発させることにより、塩も製造できた。1904 年（明治 37 年）11 月に高島（二子地区）で製塩工場が操業を始め、端島でも翌年に工場を設置した。1908 年頃には、高島に製塩工場 2 ヵ所、蒸発池 3 ヵ所、端島には製塩工場 1 ヵ所、蒸発池 9 ヵ所があった。端島・高島あわせて、1905 年 6 月～1920 年末の約 16 年間の月平均製塩量は 300

ｔに達した。『三菱合資会社高島炭坑解説書』（1907 年）によると、「当坑製塩業ハ炭坑ノ副業トシテ他ニ其例ヲ見ザルノミナラズ・・・其品質及包装量常ニ一定セリ」とあり、製造塩は品位は一等塩もあったが、大部分は二等塩として専売局に納入され、長崎市を中心として九州一円に販売された。その後、高島で発電用ボイラーに水管式の採用が決まって、ボイラー給水は清水となり、海水使用が減少、事業用地不足もあって、1921 年（大正 10 年）3 月に高島（二子）工場は廃止された。端島においてはその後も続けられたが、1935 年（昭和 10 年）2 月になって、ようやく事業用地整理のため製塩事業は廃止された（後藤・坂本 2005）。

15）地域開発を中心とする開発事業を行うため、地方公共団体や国（第 1 セクター）と民間企業（第 2 セクター）との共同出資で設立される企業体。これまで地域開発などは国や地方公共団体で行われていたが、予算などにしばられ短期間に大規模な事業を行うことがむずかしく、また民間企業は利潤追求が第一であるので、その限りでの開発しかできにくい。これらの短所を補い、長所を生かすため第 3 セクターが考えられた。おもなものに大阪府都市開発会社、むつ小川原開発会社、三陸鉄道を第 1 号とする旧国鉄特定地方交通線の転換地方鉄道などがあるが、リゾート開発での失敗例も生じている。

16）農業研究家永田照喜治氏が提唱する農法。肥料や水を極力減らすことで植物本来の持つ力を最大限に生かし、糖度、栄養価の高い野菜を作る栽培方法。

17）文化施設や公園、体育館など住民の福祉を増進する目的のために地方公共団体が設置した「公の施設」の管理について、民間事業者を含む地方公共団体が指定するもの（指定管理者）に管理を行わせる制度。収益があったときはそのまま自己のものとすることができるが、損失があった場合もその責を負わなければならない。

18）2 つ以上の学年を 1 つに編成した学級。教室の前と後ろの黒板を使って 1 人の教師が交互に生徒間を行き来しながら授業を行う。

19）登記と実際の所有者が違う、などの現状があり、真の所有者が誰だか分からない中、工事が滞りがちになるという問題もある。

20）トベラやシャリンバイの根に寄生する雌雄同株の植物。亜熱帯：九州南部、琉球、台湾に分布。喜入で最初に発見されたのでキイレツチトリモチと呼ぶ。ツチトリモチは赤いが、キイレツチトリモチは黄白色。

文献

後藤恵之輔・坂本道徳著　2005.『軍艦島の遺産　風化する近代日本の象徴』長崎新聞社.

財団法人日本離島センター　2005.『日本の島ガイド　SHIMADAS』.

斉藤　潤　2002．島で最後のヤマー池島炭鉱が閉山した日．しま　47(10)：10-22+巻頭 3-6.

高島教師の会編　1989.『わたしは高島が好きです』教育史料出版会.

地学団体研究会・新版地学辞典編集委員会　1996.『新版　地学辞典』平凡社.

堤　研二　2006．高島炭鉱閉山に伴う人口流出の分析．大阪大学大学院文学研究科紀要 46(2)：1-113+巻頭 1-5.

長崎県高島町　1949.『高島町文化史』高島町.

長崎県高島町　1999.『高島半世紀の記憶』高島町.

西原　純　1998．わが国周辺地域における炭鉱の閉山と単一企業地域の崩壊－長崎県三菱高

島炭鉱の事例－．人文地理　50：105-127.
西原　純・斉藤　寛　2002．産業のリストラクチャリング期における炭鉱閉山と三階層炭鉱労働者の帰趨－長崎県三菱高島炭鉱の事例－．人文地理　54：109-130.

参照ホームページ

ようこそ！石炭ランドへ！　http://www.sekitanland.com/
あっとながさき　http://www.at-nagasaki.jp/
エネルギー環境教育情報センター　http://www.icee.gr.jp/
『池島』体験プログラムのご案内　http://www.mitsui-matsushima.co.jp/ project/ikeshima/index.html